

『巴里籠城日誌』校訂現代語訳 (3)

松井道昭・横堀恵一

『巴里籠城日誌』旧名「法普戦争誌略」

渡正元 著

巻の3 () 内は、特に付記しない限り、正元の注である。

西暦1870年9月27日¹ (和暦明治3年庚午9月3日)

9月27日付内務省発表のトゥール派遣部からの伝令による9月24日付急報²。

全仏に以下の宣言と命令を張り出すようにさせた。

パリ包圍の前に、ジュール・ファーヴル外務大臣が敵の意図を知るため、ヴィルヘルム王のビスマルク大臣と会ったところ、ビスマルク大臣が次のとおり言明した。

普国は、戦争を継続し、仏国を二等国の状態に落としたい。普国は、アルザスとメッスまでのロレーヌを征服者の権利として求める。休戦に同意するには普国は、ストラスプール、トゥールとモン・ヴァレリアン要塞の引渡しを求めざるを得ない。パリが激怒してもいずれ廢墟に埋もれるだろう。

このように無礼な要求に対し徹底的な戦いで応える他はない。仏国は、この戦いを受け入れ、その子ら皆に期待する³。

9月26日付農商務大臣令⁴。

¹ パリは、晴。漫遊日誌には、この日、石油製品倉庫が2時間に渡る火災で焼失した(9月29日付 le Figaro) ことが記載されている。

² 9月27日付官報。

³ この後に、全ての市長選挙と制憲議會を中止、延期する旨宣言が付され、その内容の国防政府令が掲載されている。

⁴ 9月27日付官報。

9月28日、水曜日から、毎日牛500頭、羊4,000匹がパリ住民に提供される。これらの動物の肉は、それぞれの区役所に登録された肉屋により、国の名義で消費者に直接、公定価格での値段及び農商務大臣が定める条件で、小売される。市長と警視總監がこの命令を実施する。

上記の命令を補足する9月26日付農商務大臣令⁵

各屠殺場で屠殺した肉は、9月26日付農商務大臣命令に従い、その区役所に登録の肉屋へ証明のある顧客数に比例し、配分する。肉屋は、自分の区域の屠殺場からしか肉を得てはならない。肉を公定の価格で屠殺場から引き取り、各肉屋で売るが、1キログラム（我が国の重量で268匁程に当たる）当り20サンチーム（我が国の360から370文に当たる）の費用を徴収する。本命令の実施のために肉屋が組合を組織することを認める。

第3に、書簡の送達についての9月26日付国防政府令⁶

郵便庁は、仏国、アルジェリア及び外国へ送る書簡を気球で送ることを認められる。この気球で送る書簡は、重量4グラム（我が国の1匁07厘2毛である）を越えてはならない。郵送料は、20サンチームと定める。切手を貼らなければならない。財務大臣が本命令を執行する。

9月28日⁷

パリ市内への9月27日付総督命令⁸。

日が短くなり、新たに命令するまで、来る10月1日朝からパリの街への門を朝7時に開け、夕7時に閉めることとする。

伊国の新聞では、伊軍が何発かの銃声の後、降伏後に、ローマ市内に入った。ローマ法王は、市中を去っていない⁹。しかし、伊国の属国となりそうな成り行きであるという¹⁰。

⁵ 9月27日付官報。

⁶ 28日付官報。なお、葉書についても同様の命令が出された。

⁷ パリは、晴。

⁸ 28日付官報。

⁹ 上記官報。

今日、市内の状態を見ると、パリ住民の食料用に、毎日牛羊4,500頭を屠殺するとの発表があるが、その肉を2百万人に配分することが難しく、市中は非常に獣肉に不足し、終日屠殺業者の店先に人が群れ集まり、その肉を争う。また、その値が以前の4倍に騰貴した。貧しい者の困窮の程が分る。

9月29日¹¹

今朝5時から、パリ城外南東及び北東の方で、激しく砲声が轟いたが、8時頃からこの砲声が止んだ。

今朝、10月1日から別に定めがあるまでの豚肉小売の公定価格が発表¹²されたが、省略する。また、牛羊肉の1週間毎に農商務大臣が定める詳細な公定価格も発表された¹³が、また省略する。

9月30日¹⁴

本日夕刻の戦況報告では、ヴィルジュイフ高地（パリ城外である）付近で戦闘があった。仏軍は、明け方、ヴィノワ將軍の命令で前夜から集結し、出撃すると普軍から、激しい一斉射撃と砲撃を受け、仏軍も激しく応戦した。ギレム將軍指揮下の軍隊が敵をシュヴィイーから追い払った。この時、少なくとも3万人の敵の救援が現れた。ヴィノワ將軍は、これ以上攻撃すべきでないとは判断し、直ちに撤退を命じた。撤退が秩序良く行われ、砲兵も正確な射撃で支援し、最後に遊動国民衛兵大隊も前線の歩兵として沈着に対応した。我方の損害は、まだ不明とはいえ、相当で、ギレム將軍が戦死したのは、仏軍の遺憾な損失であった¹⁵。このギレム將軍が殊に勝れて勇敢な人物であり、民衆が大きく嘆き惜しんだという¹⁶。

また、本日、他の1か所¹⁷の戦闘で1旅団の兵力に過ぎないエクセア將軍

¹⁰ 正元の意見である。

¹¹ パリは、晴。

¹² 30日付官報。9月29日告示。

¹³ 同上。

¹⁴ パリは、晴。

¹⁵ 10月1日付官報。

¹⁶ 正元の意見である。

の軍が大いに敵を苦めたという。また、軍経理部と国際傷病兵救済協会が献身的に任務を果たした。30日の戦闘は、兵士の功労や指揮官への期待や名誉ある防衛努力を示すものとして政府が大きく褒め称えた¹⁸。

10月1日¹⁹ (和暦9月7日)

昨9月30日、ストラスブルとトゥル²⁰の2要塞が防衛の手段が尽き、陥落した²¹。将校と兵士が全員、虜となり、大砲や諸兵器が皆、敵に渡った。この要塞の籠城が50余日だった。ストラスブル要塞のユーリック司令官が勇敢な将軍であるという。

10月2日²²

今日、パリ市中に発表された国防政府令²³。

50余日の破滅的な包囲の間の敵への英雄的抵抗により気高い都市であるストラスブルがアルザスと仏国の切り離せない結び付きをさらに強めたこと、包囲の始めから止まないパリ市民のストラスブルへの同情、心打つ愛国心の発露とストラスブルや東部の包囲された都市が示した模範への謝恩を考慮し、栄光のストラスブル市および東部諸市の共和国の一体性への貢献とパリ市民の寛大な気持ちを記念し、パリ市コンコルド広場²⁴に現在設置するストラスブル市の像を新たに青銅で铸造し、東部諸県の抵抗を記念する碑文と共にその場所に設置する。文部大臣が本命令を執行する。

第2の発表、10月1日付軍務大臣から国防政府への報告²⁵。

17 クレティユ付近である。

18 10月1日付官報。

19 パリは、晴。

20 30日付 *le Gaulois* は、トゥル陥落のニュースが株の取引所に入り、混乱が起きたことを報じている。

21 政府発表は10月2日付ガンベッタ内務大臣の発表 (3日付官報掲載)。

22 パリは、晴。

23 10月3日付官報。

24 各隅に、ルアン、ブレスト、ナント、ボルドー、マルセイユ、リヨン、ストラスブル、リールの石像が置かれている。

25 2日付官報。

軍務大臣報告によれば、現在、第13及び14軍団の他、パリにいる全ての遊動国民衛兵大隊には、シャスポー銃が配備され、常駐国民衛兵228大隊には、多様な形式の小銃が配備されている。兵士全てに配備された銃は、総計約40万丁である。また、17万丁の多様な銃がセイヌ国民衛兵用に留保されている。この銃には、英国から購入予定の銃等により追加される。以下が今、国民衛兵228個大隊に配備された銃28万丁の種別内訳である。

元込め管打ち銃9万5千丁、施條銃12万丁、垂施條銃5万5千丁、カラビン銃（英国製）各種1万丁。総計28万丁。

この他の森林保護官等の大隊、義勇兵の中隊等53部隊にシャスポー銃やスナイデル銃が大半の各種銃2万丁、セイヌ及び地方の遊動国民衛兵用の9万丁を含め、総計39万丁である。この数字は、正規兵に配備された銃を含まず、実際よりも少ない。残りの1万丁は、故障した銃の取換えや1870年度徴兵の若い兵士用となり、軍務省にこれ以上配分する銃がない。以下、省略する。

10月3日²⁶

今日、受けたヴェルサイユ（パリの隣の地域で、距離は我が国の6里ばかりである）からの急告では、この度のパリ籠城中、その周辺の内、このヴェルサイユのように過酷な扱いや苦悩を受けたところはない。当地は、初めから防御の兵隊がなく、敵の乱入に抵抗する人がなく、敵軍が入り、その権力を恣にし、その仕業が殊に過酷であり、その苦痛が実に悲嘆にた

²⁶ パリは、晴。漫遊日誌では、この日が旧暦9月9日の重陽の節句に当たるので、「重陽9月9日」と題し、次の感想を記している。

今度、パリ市の籠城の状況では、その危急存亡の時期がこの朝夕に迫っている。私たちは、今、敵軍百万人に包囲されている。籠城中は、ただ軍の動きにだけ耳目を寄せ、日の経つのを忘れていた。今夕、突然、日本の歴史を思い出し、我が重陽の夕べであり、日本にいれば、草花の赤白、艶やかな香りが競うを見るはずである。しかし、囚らずも、欧州で甲乙を争う二強がその勇ましさを争い、今、その雌雄、紅白を一度の決める状況にあって、まさにすきんだ気持ちだ。いずれをか、見競うべくも、白草の、色香を競う、今日となりぬる（仮名遣いを改めた）。

えない。さらに、普軍総督が今日、次の命令を当市中に発表した²⁷。

フリードリヒ・カール普国親王²⁸の命により、その参謀長ブルメンター
ル將軍は、以下の命令を広く市内に公布する。

現在の戦争中、当ヴェルサイユ市民の内、貸家持ちの主人、金銀の貸
主、貸部屋の持ち主、その他諸職人等は、月々百フラン以上500フラン
までの租税を普軍総督へ納める。普軍滞在中、諸兵士の食糧その他必要
品を速やかに供給する。市中の家屋が兵士宿泊に必要な時は、背かず、
引き渡す。兵士滞留中、日夜共に出入りには差支えないよう、その都度、
開閉に逆らわない。以上に違反すれば、直ちに軍法により、死刑に処す。

現在の戦争中、当市の住民で、退去し、他方へ移転したい者に望み通
り速やかに退去を許す。しかし、パリの方に退去できない。シャルトル
への道路だけを明け、退去の道とするので同市に向け、退くこと。もし、
この令を犯し、パリ市道路の方へ逃げ去る者は、一言の尋問もせず直
ちに弾丸によって撃ち殺す。

当市民で、夜中に家に帰り、過ぎさない者の家屋を直ちに取り上げる。
また大小の包物や兵器を携えることを固く禁じる。

以上のような厳酷な命令を市内の所々に張り出し、当市の人民がかなり
苦勞をしているという。

本3日の朝、この度戦死したギレム將軍の遺体を、アンヴァリッド（廢
兵院）²⁹で懇ろに葬ったという³⁰。

パリ市内では近頃、食料の獸肉が乏しくなり、このほど馬肉を屠殺し、
牛羊馬の3種類の肉を食肉に当てた。なお、その肉が十分ではなく、多く
の人が屠殺者の門前で終日群れ集まった。

²⁷ 出典未確認。5日付 le Journal des débats は、脱走兵らから聞いた話として、ヴェ
ルサイユでの普国軍人の粗暴な行動を報じている。

²⁸ 従来の『王子』の表記から改める。以下同じ。

²⁹ ナポレオン一世皇帝の棺が置かれている。

³⁰ 3日付官報の予告記事に3日午前9時からの葬儀の出席者は同記事を招待状
として持参することを求め、5日付官報に葬儀の様子を記載する。

10月4日³¹

英国女王³²から普国王に「神と人道の名において、陛下におかれては、その勝利を損なわずに、両国民のため、尊い血のこれ以上の流出を避け、その美しいパリを救って頂きたい。」と書き送った。普王は、「陛下にご安心頂きたい気持ちはある。そして神も私が尊い血が流れるのをどれほど残念に思うかお分かりである。しかし、神は、また、これ以上血を1滴も流してはならないと私に命じられてもいない。将来、仏国の軍事的野心の全ての打撃から欧州を守る、長続きする平和が署名できるかどうかは、パリだけにかかっている。しかし、私は、できるだけ流れる血が少ない方法をとって、その美しい市が苦しまないようにしたい。」との返書を送った³³。

今日、またビスマルク氏の誇張した言葉を記すが、省略する。

10月5日³⁴

9月29日付トゥール政府派遣部（この派遣部は、パリ市籠城中、仏全国の行政を司る臨時特別政府である）から仏全国へ命令³⁵。

各県知事は、直ちに、まだ正規軍か遊動国民衛兵隊に加わらない全志願者とその県内に住む年齢21歳以上40歳までの独身か子のない寡夫の仏国民全てを遊動国民衛兵の中隊に編成する。行動中の軍に召集された者は、軍務大臣の指図があるまでは、全て遊動国民衛兵隊に所属する。各県知事は、遊動国民衛兵を直ちに軍事訓練に参加させる。遊動国民衛兵隊中隊を編成し次第、軍務大臣の指揮下に置く。諸県知事は、武器が常駐国民衛兵隊への武装に不足するときは、必要により、狩猟等の全ての武器を収用できる。内務省行政事務担当次官が本命令を執行する。

³¹ パリは、晴。

³² ヴィクトリア女王。娘のヴィクトリアがヴィルヘルム1世の息子(後のフリードリヒ3世)と結婚していた。

³³ 6日付 Journal des débats の l'Electeur Libre の引用記事。

³⁴ パリは、晴。

³⁵ 7日付 Journal des débats 掲載のセイヌ・アンフェリエール県知事からの報告電報に示された命令。

10月6日³⁶

今日1羽の伝書鳩がパリに文書を運んだ（籠城中書簡の往復は、皆気球を使うといっても、もし急な用事や小事件の時は、この伝書鳩の翼の下や首の下に文書を括り付けて放す）。トゥール政府からの報告³⁷では、この度ブルターニュ地方でパリ応援の軍隊のため7万6千人の市民を募集したという。

今朝9時、パリ市モンマルトル地区から1つ気球を上げた。これは、ガンベッタ内務大臣が仏国政府派遣部のあるトゥールに行くため、部下2名と伝書鳩6羽と共に出発したという³⁸。

パリを囲む普軍がこの2、3日14か所に布陣し、全軍が50万人、今、仏国内の全普軍が百余万人である。こうして普王がヴェルサイユ城に本陣を据えた³⁹。

10月7日⁴⁰

市中に発表の10月7日国防政府令⁴¹。

パリの籠城の長期化に伴い、内務大臣が直接諸県と連絡し、パリと連絡し、防衛を強化するため、ガンベッタ内務大臣を政府トゥール派遣部に派遣し、同大臣が直ちに、その職務に就く。ファーヴル外務大臣をパリでの内務大臣臨時代理に任命する。

この命令の実施のため、ガンベッタ内務大臣が今朝、気球でパリを出発した。同氏が諸県宛の次の要旨の宣言を携えた。

仏国民へ

³⁶ パリは、霧。

³⁷ 出典未確認。

³⁸ ガンベッタが気球に乗ったのは、10月7日である。この日気球は3台上げられ、ガンベッタの乗った気球アルマン・バルベ号は、98km 飛行し、オワス県エピニューズに達した。2台目のジョルジュ・サンド号は、120km 飛行し、ソナム県のクレムリーに達したが、3台目は、12km しか飛ばず、セイヌ・サンドニ県のステンに着いた。

³⁹ 出典未確認。

⁴⁰ パリは、曇、夜雨。

⁴¹ 8日付官報。

現在、パリ市民は、世界に独特の様相を示している。人口2百万人の都市が四方を包圍され、前政権の犯罪的怠慢により今日まで、救援軍を欠きながら、勇気と冷静さにより、全ての危険と包圍による全ての恐怖を受け止めてきた。敵はそれを信じないで、パリが無防備と思っている。首府で恐るべき多くの作業が行われている。しかも、40万人の市民が命がけで守っている。敵はパリが無政府状態にあると思っている。敵が混乱を招く反乱を待っている。反乱が大砲よりも確実に、包圍した場所を敵に引き渡す。敵はそれを待っている。パリ市民は団結し、武装し、十分蓄え、決意し、仏国の幸運を信じ、長きに亘る侵略者の前進を阻むには、自らと良き秩序とその我慢しかないことを知っている。仏国民よ！パリ市民が外国人の鉄と火に立ち向かうのは、祖国、栄光、そして将来のためである。我らにその息子たちを与え、毎日、その情熱と武勇を示す勇敢な遊動国民衛兵を送り出した貴方たちよ、一団となり、立ち上がれ、そして救援に来てほしい。我らは孤立しても名誉を守る。しかし、貴方たちと一緒に、又貴方たちにより、仏国を救うことを我らは誓う。

この命令が去る4日の日付であり、本7日に発表した⁴²。かつてこのような遅滞がなかった。しかし、内務大臣が密かに気球でパリを出ることが先に敵軍に漏れることを恐れ、これを秘し、出発後に発表したと思われる。

今朝、パリ市内2か所からの気球4台を揚げた。モンマルトル地区から揚げた2台の気球中に1台に4名ずつ、内務大臣始め役人8名が乗った。また、伝書鳩30羽を入れた⁴³。

今朝、150から200人の婦人が病院の旗を立て、パリ市庁舎に来て、病院の所用と負傷者の世話に今徴用している多くの男子を皆防戦兵士に編入

⁴² 8日付官報は、7日付と発表するが、このような可能性はある。

⁴³ 8日付 *le Journal des débats* は、最初の気球にガンベッタとその秘書官、2台目の気球にアメリカ人2人と新任のブルターニュ郡長を乗せ、両気球が書簡も運んだとする。

し、我々婦人に負傷者を世話させて欲しいと訴えた⁴⁴。この時、高官ロシュフォール氏が出て、「今の皆様のご希望に何よりも感嘆した。きっと政府はこれを許すだろう。私が直ちにその希望を上司に伝えよう。皆それぞれは、まず退き、その判断を待つて欲しい。」と答えた。そこで婦人達一同が退去したという⁴⁵。

10月8日⁴⁶

今夕、ガンベッタ大臣と一緒に運ばれた伝書鳩の1羽が帰った。したがって、内務大臣は無事に地上に降りた⁴⁷。

今日、パリに到来した10月3日付英国ロンドンの新聞を見ると、このほど、英国と中国との間で一事件が起こり、その平和が破れ、双方が兵力を用いざるをえない勢いであり、英国は、その軍艦の準備ができ次第、出兵する模様だという⁴⁸。

伊国とローマの戦争報道に、近日、伊軍がローマに乱入し、その城に近く迫ったという。そこでローマが和睦を求めた。ここで伊国がローマ領を全て併合しようとしているという⁴⁹。

露国の軍備。現在、欧州に2つの強国⁵⁰の興廃を賭けた大戦がある。次には、中国と英国との間に一事件が起こった。このため、露国が密かに軍備をし、勢力をアジアに伸ばそうと企てた。しかし、露国が僅かな間に軍備を整えることは、できない。

10月9日⁵¹

パリ市内へ10月8日付国防政府大統領兼パリ市総督命令⁵²。

⁴⁴ 出典未確認。

⁴⁵ 出典未確認。

⁴⁶ パリは、雨。

⁴⁷ 9日付 le Journal des débats

⁴⁸ 11日付 le Journal débat は la Vérité 記事を引用し、天津での虐殺事件以降の英国での緊張感の高まりを伝えている。

⁴⁹ 11日付 le Journal débat は la Vérité 記事を引用し、ローマ市の問題はほぼ決着したと伝えている。

⁵⁰ 仏国と普国のこと。

⁵¹ パリは、雨。

⁵² 9日付官報。

城壁上の通路の通行の自由が乱用され、城壁工事の妨げとなるので、城壁上の通路の通行を許される者は、士官、技師及びその作業に雇われた作業員、この通りにある家の住民、と総督の参謀長発行の証明証を持つ者だけとする。作業用の馬車と上記の人々の馬車の通行が同様に自由である。上記を直ちに実施し、その地区の司令官が厳格に適用する。

新聞中にヴェルサイユの大泉と題するもの⁵³がある。去る6日、普王の命令でヴェルサイユ城（パリ市外6里にある）にある仏国で有名な1つの大きな噴水を吹き上げさせた。全て噴泉は、仏国の王城及び城内等全て散歩道があるところに造り、水を地上や地中から高く吹き上げる。その中、王城の内にあるものは、約14、5間の高さに上げ、その眺めが最も珍しい。また、このヴェルサイユ城の噴泉が仏国では1番だという。このとき普王太子や参謀本部士官が集まり、軍の音楽を奏で、一同が大宴会を催した。しかし、その市民が日夜苦しみ悶え、敵軍乱入以来その家屋を奪われ、それに加え、月々租税を敵軍に徴収され、大きく愁い、苦しむという。

10月10日⁵⁴

今日、内外で戦闘がない。また、新聞記事中に異状がない。

考えると、今回のパリ籠城の始めに城外への各道路を遮断した後、市内で不足する食料が当然多かった。特に、ミルク、チーズ、バターの類がなくなってから既に久しい。また、魚類、鳥類が手に入らなくなってからも久しい。今日、政府が発売する牛5百頭や羊4千匹を屠殺し、食料に充てるというが、どうして2百万人の口を満たせるだろうか。私が屠殺する牛羊の市内の人口への配分を試算すると、平均して1日、牛1頭、羊8匹を4千人に配分することになる。そうすると、千人に牛4分の1頭、羊2匹の配分となる。その肉の量が分るだろう。そこで、先日以来多く馬を屠し、牛羊馬の3肉を売っても、人々にはなお肉が足りず、屠殺業者の門前が終日混雑する。また、市内の諸食料価格が騰貴し、平常時の3、4倍になり、

⁵³ 12日付 le Temps が la Vérité の記事を引用している。

⁵⁴ パリは、晴。

貧乏人が非常に困窮し、近頃、市内の路上に日夜小さな店を並べ、争って廉価な些少の物品を売っている。しかし、これらの店の利益は、食べていくには足りないだろう。今、市民が食料の他、濫りに無用の物品を求めないからである。この籠城が永くなるに従い、市民の困窮が増すことが分かるだろう。

私が内心思うと、仏国の体制や風習では、人民が皆政治に関ろうとし、民間に権力があり、政府に威力が薄く、民心が沸騰し易く、それが激動する時に常に政府を突き上げ、制度を転換させようとする。今、この共和制度も同じである。私がまた普軍の動静を察すると、60万人の兵でパリの周囲を囲み、強いて攻めず、また戦いを求めず、落ち着いて長く陣を構える様子を示し、残って籠城している7市へはパリからの応援を断ち、既に攻め落としたストラズブルのように、日夜要塞を攻撃し、徐々にこれを攻略し、その一連の城を次第に落とした後、諸兵を合わせ、パリの本城に迫り、戦わずに人心を委縮させ、ただ手を下さず、城中で限りがある食料の尽きるのを待つという様子である。また、パリ市中の事情を見ると、市内の守備兵は、自ら死に場所に入り、敵を追い払おうとする勢いがなく、また囲みを破り、道を開こうとする元気もない。ただ固く守るだけである。私がまた推察すると、政府の対応が密かに期待するものが2つある。その1つが先日出した使節が欧州の英、露、墺、伊4大強国全てを巡り、それらの国による調停に任せること、また1つが仏国内の諸県の国民衛兵を募り、部隊を編成し、敵の背後を襲撃させるという計略だ。しかし、市内では、もし籠城が長引き、食料が尽き、困窮が切迫し、老人幼児が街に叫び、婦女が道に叫ぶような日が来れば、恐らく人民が激動し、活路を求めようとし、予想外の変動になりかねない。攻め手の狙いが恐らくこれだろう。そっと仏政府の拳動を見れば、パリ市内の事情は、大体、このようである。後日の参考にこれをとりあえず記す。

連日の戦闘で伊軍がついにローマに勝ち、ローマ法王が出て降服した。

その土地が全て伊国領に入り、今後、その一部となる⁵⁵。

今日の新聞報道に、去る7日、ガンベッタ内務大臣の気球とともに他の気球もパリ市内を同時に出発したという。そしてこの2台の気球が南方に向かい、風力に従い、しばらく走ったが、突然風が止み、空中に留まり、漂った。しかし、そこが普軍の陣営の上であり、普軍がこれを見てこの気球に向け、大砲や無数の小銃を発射した。この時1発の弾丸がガンベッタ氏の髪に触れた。これを見て機関手が直ちにその重しの砂囊（気球の昇降を適度にするために、その中に貯蓄している砂を詰めている袋である）を捨て、気球が再び空に昇り、辛うじて危難を避けたという⁵⁶。

10月11日⁵⁷

新聞が城外の小規模な戦闘を載せるが、別に変ったことではないので省略し、記さない。

最近、食料の値が沸騰するので、先日来、市中所々に救助のため、仮の食堂を設けている。仏語でこれをカンティニエール・ナショナルという。この店には、少しの肉類とスープだけがある。ここで食事をする者は、各々パンを持参し、その肉やスープを貰い、食べる。これは、本当に貧しく困窮する者を救うため、開いた会食の場である。その料金が1杯のスープあるいは1皿の肉で仏貨幣の20サンチーム、我が国の300文ばかりに当たる。パンの値段が高くないので、困窮する貧しい者も、これを買える。また、この20サンチームの小貨幣は、老人童女でも、容易に得られる。これがパリ市中の豪商や富者が施しの行いとして設けた会食の場である。

今日、パリ城外東南の要塞の近辺に戦闘があった。夕刻まで激しく砲声が聞こえた。

10月12日⁵⁸

記載すべき異状はない。

⁵⁵ 出典未確認。

⁵⁶ 11月11日付 le Temps 再引用の la Vérité 引用の the New-York Tribune 記事。ただし、普軍の射撃を気球から荷物等を投げ捨て、上昇し始めた後とする。

⁵⁷ パリは、曇。

⁵⁸ パリは、午前小雨、後曇。

今日、私の知人、レスピオー陸軍中佐から軍務省の通行証を手に入れ、パリ市外東南イヴリとシャラントンの2要塞に行き、所々、野外の陣営、要塞、砲台を巡見すると、その管理が特に厳しく、当然、証明証を持たない者は1町の間も通行できない。

また、その道路、市内や広野には所々、砲台が満ち、城外では、数百千の人家が全て空虚であり、1人も残らず、所々に兵隊だけが集まるのを見る。今考えると、パリ市周囲の人民皆が家屋を棄て、パリ市内に集まり、人口が数えきれないほど多くなる。私が以前、市内の人口を2百万人と聞いた。そうすると、現在籠城後、総ての退去する老幼婦女子や外国人で離散する者を80万人として、今残る人口が120万人となる。これに陸海軍や諸地方から召集した国民衛兵を20万人とし、合わせれば、今市内の人口が140から150万人と推測される。しかし、今日、この城周囲の住民が皆家屋を棄て、市内に入るのを見て、初めて人口が以前より増え、2百万人を超し、あの食料の獣肉が非常に不足する理由が分かった。

昨日、パリ東南の要塞の外で戦闘があり、双方の死傷が約1千余人、今日、仏軍中に捕虜の普兵百人を送って来た⁵⁹。

10月13日⁶⁰

今日、最近敵軍の陣営となったサン・クルー城に仏軍が大砲を発射し、全て焼亡した⁶¹。このサン・クルー城は、帝の別宮殿で、殊に夏の間、避暑のため、パリを出て居住する、パリ近隣の要害の地である。今、普軍がここに陣取れば、パリ防衛の障害になるので、全て焼き捨てたと察せられる。

10月14日⁶²

新聞記事中でこの日誌に書くこともない。パリ周囲の要塞砲台の防御の対策が大いに整い、城への諸道の地下全てに多くの地雷を埋め、守備が堅固である。私が微かに聞くと、トロシュウ将軍が去る8月下旬、パリ総督

⁵⁹ 出典未確認。

⁶⁰ パリは、曇。

⁶¹ 14日付官報。

⁶² パリは、曇。

に任じられ、帰途、諸道や城中の動静を視察し、とてもこの城であの勝ち誇った強敵を防ぐには、1週間も持つまいと言った。しかし、今日、市内の守備がよく整い、また国民衛兵も増加し、ただ、飢餓の心配さえなければ暫く保つことができる。私が思うに恐ろしいのは期間が長引き、食料が尽きることだ。

10月15日⁶³

世間の噂では、一昨日、ビスマルク普首相が、ファーヴル仏外務大臣に書を送り、数日間の休戦を提案している、などという⁶⁴。

1市民がベルギー経由で得たメッスから脱出した男からのメッスとバゼイヌ軍の状況についての10月6日付報告である⁶⁵。

メッスの状況がとにかく良い。パンが半キロで20サンチーム、ワインが1リットル75サンチームであり、ホテルでも3フランで、まあまあの夕食ができる。獣肉類も牛が減多になく、馬が普通であるが、羊や豚が不足しない。コーヒー、チョコレート、インゲンも十分だ。物乞いもない。仏国の共和制宣言は受け入れられ、世間は平穏である。

8月14日以来のメッス近辺での仏国の推測する独軍の死傷が大体次のようである。

8月14日ボルニーの戦い12,000人、同16日グラヴロットの戦い80,000人、同18日レズンヴィルとサン・プリヴァの戦い20,000人、同31日と9月1日サント・バルブとサント・リュッフインの戦い10,000人で、要するに、カール普親王の軍は、メッス周辺で約120,000人を失ったという。

仏司令官バゼイヌ元帥の兵の損失が約30,000人である。8月14日、16日、18日の3日間に約15,000人が負傷し、8月31日と9月1日の負傷者が750人であり、これらの負傷者の内、普兵が1,000人である。バゼイヌ司令官がパリに進軍するための出撃を全く望まず、去る8月31日と9月1日

⁶³ パリは、曇、小雨。

⁶⁴ 15日付官報（誤って13日付と記載）に11日11時から午後5時まで普側の申入れにより、戦死者収容のための休戦があった。

⁶⁵ 18日付 le Temps

の戦いには、カール親王の軍をメッス城下に殲滅した後、王太子の軍を追撃するため、マクマオンを待った。もしマクマオンの軍がスタン城の戦いを避け、2日前に来れば、仏国を救い、普兵をライン河の向こうに追い払ったであろう。メッスでこれを疑う者がいない⁶⁶。

10月16日⁶⁷

仏国全国へ10月1日付国防政府令⁶⁸。

制憲議会選挙日を10月16日と定めた9月29日トゥール派遣部発10月1日政府着の電報、同選挙を延期する旨の9月23日付政府及び同24日付トゥール派遣部令を考慮し、就中、同様の決定の実施が物理的に困難であること等を理解し、国防政府はこの命令により、共和国の全土で同選挙が実施できるまで、上記延期を維持する。この命令に反し、執られた全ての措置を無効とする。本命令は、派遣部により、全ての県で発表される。

10月8日、朝6時8分ザールブリュッケン発通報による。昨7日、籠城軍がメッス要塞から数回大規模な出撃をし、ラドン、シャン・グラン等サン・テロワ要塞の北の数か村が攻撃された。作戦に仏軍4万人参加し、普軍は約1千人が死傷した。また仏軍の被害も、ほぼ同じであった⁶⁹。

10月8日、2時30分ヴェルサイユ発普軍の報告による。昨夜メッスに籠城の仏軍がモゼルの両岸で普軍を襲撃し、城中に引き上げ、仏兵が2,500人戦死し、普軍の死傷者が600人であった⁷⁰。

10月11日付ルアン発報道⁷¹による。ルアンからアルブレヒト普親王が去る10月8日朝4時トゥリを退去したと通報がある。このトゥリには4普親王

⁶⁶ 18日付 le Temps

⁶⁷ パリは、曇、小雨。

⁶⁸ 17日付 le Journal des débats 引用の la Vérité。同記事は、この原本が普軍の手に落ちたとする。

⁶⁹ 同上。

⁷⁰ 16日付官報引用の Daily News。

⁷¹ 18日付 le Temps 再引用の la Vérité 引用の 11日付 le Nouvelliste de Rouen。ただし、le Journal du Loiret による補足としている。

がいて、敵兵が住民の家に居住した。4親王が市長の館を占領し、洗濯場と麦わら一束を残していった。また、市民達は、普兵士に毎日パン1ポンド半、肉2ポンドと酒を望むままに与えねばならなかった。普兵は、夜、容易に酔った。ただし、乱暴狼藉をしなかったが、市中にからす麦1粒も残さなかった。バイエルン兵300人が1教会に宿営したが、何の損害もなかった。ボース・オルレアネイズ地方で敵が奪った羊と乳牛の全てを取り返したとは遥かに遠い状況である。

10月8日夜から9日朝まで、オルレアンに着いた普兵捕虜27人が皆、捕虜収容所に送られた。しかし、待遇は親切であり、タバコをたくさん吸い、自ら用意するコーヒーを大事にした⁷²。

9日朝、敵兵の様々な武器を積んだ馬車がオルレアン市庁に着いた。その武器は、小銃17丁、槍1本、騎兵の剣7本、歩兵の剣18本、士官の兜1面を含む兜18面、ある程度の弾薬入れ、弾薬帯、薬莢、十砲弾1発、背囊と装備数組、ピストル3丁の入った鞍の革袋である。これらは、記帳後に、軍当局に引き渡された。この馬車に乗った騎兵1人が収容所に連れて行かれた⁷³。

トゥールからの報道で、予告された伊国のガリバルディ⁷⁴将軍が8日、同市に到着した。この有名な共和主義者は、すぐ、県庁に連れて行かれ、高官クレミュー氏始め4、5人の訪問を受けた。当市民が揃って、ガリバルディ氏を歓呼で迎えた。到着後すぐ、彼は、トゥールに駐屯する義勇兵大隊をクレミュー氏と一緒に閲兵した。その後、この2老人は、大きな感激を露わにして抱き合った。伊共和派と仏共和派がこの兄弟のような抱擁で結ばれた⁷⁵。

トゥール市からの10月11日朝発第2の通報によれば、ティエール氏が前

⁷² 同上。

⁷³ 同上。

⁷⁴ イタリアの統一に功績のあった将軍。

⁷⁵ 17日付 le Journal des débats 引用の la Vérité。他に le Temps 等。

日墺国の首都に到着し、フォン・ボイスト首相と2時間対談した後、墺帝に1時間拝謁した。午後、諸大臣に再度面会し、フィレンツェに向かった⁷⁶。

西国マドリードの10月8日付新聞によれば、今日、議会の委員会で、サガスタ⁷⁷氏が言うには、現下の仏国の状況により、英国と露国に平和のための友好的な介入を頼むべきと信じるが、2国どちらも、介入できないと言った。しかし、英政府からビスマルク首相とジュール・ファーヴル外相が話し合い易くするためにあらゆる努力をするとの答えを得たという⁷⁸。

独国の新聞は、露皇后がこの度独国のヴェルテンベルグ連盟病院に多くの物品とかなりの金品を病人と負傷者の療養のために贈ったという。現在、独内の仏軍捕虜が負傷者を除き、総人数127,277人、内士官3,577人、兵士123,700人と記す⁷⁹。

10月17日⁸⁰

新聞中には、書く価値のあることはない。

私の知人、レスピオー歩兵中佐は、先日の負傷が全快し、再び出陣し、5千人の兵を率い、パリ城外東南の砦に前衛として布陣した。昨日、彼が私に、その陣営に来て、敵味方の対陣やその土地の様子、諸々の状況を巡視し、そして昼食を共にしたいとの1文書を寄越した。そこで、私は、今朝9時、1台の小馬車に乗り、軍務省の通行証を受け取り、パリ城の砲台門を出て、遠くその陣営⁸¹に向かった。この時、レスピオー氏は、砲台に布陣する兵を指揮するため出ていたが、幸い、途中で遭遇した。直ちに握手し、別れた後の無事を祝し、同じ車で正午近くその陣営に着いた。間もなく、昼食に臨み、同席の皆が歩兵隊長、歩兵指揮官、医官、工兵将校等この砦の諸指揮官であった。終わるとレスピオー氏が私を陣の前の前営砲

⁷⁶ 16日付官報。

⁷⁷ スペインの政治家。当時の首相は、ファン プリム。

⁷⁸ 16日付官報。

⁷⁹ 16日付官報引用の8日付シュツットガルト発 Times 報道。

⁸⁰ パリは、晴、朝一時雨。

⁸¹ 漫遊日誌は、イヴリ要塞とシャラントン要塞の間にある陣地とする。

台に誘った。ここから約5町先の普軍の前営が眼前にあった。この辺りの砲台を巡回し、その後、また同行し、付近の村落や市中を所々歩き回り、諸機器のある1つの6階建て櫓に登り、敵味方の諸陣を眺めた。敵の陣営が眼下にあり、この建物が仏軍の監視塔の様子で3から5人の兵士と士官がいた。ここから望遠鏡で独軍の陣地や配置を見ていた時に、後方のイヴリ要塞から2、3発の砲弾を普軍の前営中に撃ち込んだ。しかし、普軍は、これに応じなかった。私はこれらの様子を見終わった後、元の陣営に帰り、それから別れを告げ、パリ城内に入り、黄昏時に帰校した。今日は、実に最近の良い眺めであり、同席の諸将校も私に真心を尽くした。

パリ市内の各道路の両側に設けたガス灯や各家の点火口を近頃から半分に減らした。このガス灯は、平常は、市内の各道路を照らし、実に白昼のようで、店や家屋それぞれに点灯するのは、まるで花のようである。そのため、市内は明るく、夜中はさらに美しい景観であった。しかし、この頃は、街中がやや朦朧とし、各家の点灯も政府の命令があり、10時半を限りに皆消している⁸²。

10月18日⁸³

パリ市内への10月18日付総督命令⁸⁴。

本日までパリ総督が発行していた城周囲の諸道の通行許可証は、今後、イヴリからセーヴルまでの間の前衛正面をヴィノワ將軍（モンパルナス駅）に、セーヴルからサントゥーアンまでの間の前衛正面をデュクロ將軍（マイヨー門）に委ねる。10月12日付官報に掲載のパリとサン・ドニ要塞の間の通行に関する措置を継続し、この市の前にある村への通行許可証をサン・ドニの最高司令官が与える。要塞への立入りは、用務のため呼ばれた者以外は、厳しく禁止する。要塞と首都との間の通行は自由である。家畜、飲料、食料品その他の商品の搬出は、パリ市庁の定め

⁸² 16日付官報掲載の消費者への10時半以降の使用停止のパリ市長要請文。

⁸³ パリは、晴。

⁸⁴ 18日付 le Journal des débats

る書式に従う。

10月19日⁸⁵

新聞中に、先日、ファーヴル外務大臣が普軍中に行き、ビスマルク首相と休戦の話に及び、先に伝えた3条件を承諾しなければ、休戦できないと言われたという。そこで、仏政府が憤然とし、再び和解を持ち出さなかった。全国民に誓い、防戦の計画を定めた。

そもそもビスマルク氏の意図は、事を長引かせ、仏国の人民が困窮の極みで自ら徐々に乱れていく機会を待つものと思われる。

ところが今日、市内防御の力を一つに合わせ、準備がかなりしっかりしてきたので、また1つの策を考え、使者を出し、暫く休戦を交渉し、この休戦中普兵がパリに入るよう提案した。しかし、仏国が同意せず、その会談が再び決裂し、ビスマルク氏の策略が大きく外れたと書いてあった⁸⁶。

最近、パリ市内の夫々の会社が出す新聞が全て27種類である。日毎夜毎に出版され、その巻数がかなり多いことがわかる。

10月20日⁸⁷

籠城が長くなり、かねて政府で備蓄している肉類の供給が難しくなり、屠殺業者の門前が非常に混雑するので、昨日から市中の家毎に食料の肉を買う小さな券⁸⁸を渡した。その方法は、区長が申し出られた家族の人数を記し、獣肉を売り渡すよう書いた紙券を渡す⁸⁹。人々がこれを持ち、屠殺業者と肉屋に行き、買う。この紙券がなければ、買えない。1日1人分の

⁸⁵ パリは、晴。

⁸⁶ 出典未確認であるが、18日付官報に North German Correspondent に掲載のビスマルクのファーヴル宛公開質問状の仏語訳とファーヴル外務大臣が在外使節宛通達の形で出した反論を掲載している。その中で、ビスマルクは、ファーヴルとの会談の主題は、講和条約でなく、休戦であり、また、モゼル地方の割譲、「ドイツの玄関の鍵」の確保、休戦中の現状維持保証を求めている。ファーヴルは、領土変更なしの休戦講和、メッスの休戦地域からの除外等から反論する。正元がこの官報記事を指す可能性がある。

⁸⁷ パリは、晴。

⁸⁸ 配給券のことである。

⁸⁹ 25日付 le Temps 記事がこの配給券を説明している。

肉量百グラム（我が国の27匁である）で、そうして3日分を一度に買いおくことになる。屠殺業者や肉屋の門前に明け方2時頃から日暮れまで、人が群集し、絶え間がない。この頃、国民衛兵が3から5人ずつ出張し、前後順序よく混乱がないように取り締まる。このように人数に応じ、肉量の券を出すのは、全く籠城を長く続けるためである。そして初め、籠城中の貯蔵獣肉が牛4万頭、羊30万匹で2か月の積りだったが、今既に1か月を経過し、籠城期間が予め分らない。既に貯蔵の肉の半分を食べ尽くした。別に塩漬けの肉があるが、これも数日間の蓄えしかない。そこで獣肉売買の法が益々厳酷になるが、馬肉は、まだ制限がない。人が手に入れ、買うのは自由である⁹⁰。ただ、その値段が馬肉も牛肉と同じである。

今日、市内を散策すると、約1町間に料理店が2、3軒もあり、ことに多い。今夜、その門の張紙に、今度政府の命令で食料の肉を一定量に制限された。そこで今日から提供する肉を1人に1皿しか出せないと書いてあった。その状態は、既にこのようである。明日の食糧の欠乏が察せられる。

10月21日⁹¹

新聞日誌の附録によれば、今回パリ籠城の日が長くなり、市内貯蔵の獣肉が次第に不足する。しかし、市内にいる馬の数が平常は8万頭であるが、この度の戦闘用の騎兵と砲兵の馬を合わせ、その数が10万頭に上る。1頭の馬肉を仏国の重量単位で250キログラム（即ち我が国の単位では67貫25匁である）とすれば、この10万頭の馬肉の量が2,500万キログラム（我が2百50万貫に当たる）で、今、市内の人口が約2百万人であり、1人の食肉25キログラム（我が国の67匁に当たる、即ち各人口に配る量である）を配っても50日の供給となる。また婦女小児でこれを食べられない者を除けば、約2か月の食肉はこの馬肉で不足しないといえる。

⁹⁰ 21日付官報掲載の20日付農商務大臣命令で健康な馬の肉のみを屠殺業者が屠殺し、馬肉市場で、月曜日、水曜日と金曜日に売買する旨定めた。定価の定めはない。

⁹¹ パリは、曇。

パリ籠城中の諸地方や他国との手紙の送付につき、自分から手紙を送り、先方から返書を受け取る⁹²代金を10フラン（我が国の2両である）、また片道の代金を5フランと定めた。ただし、以前の手紙の送料は、我が国の1朱位だった⁹³。今でも気球であれば、その手紙の代金が以前と異ならない。ただ、手紙の重さで違うだけだ。

10月22日⁹⁴

デュクロ將軍から22日付戦況報告⁹⁵による。去る21日トロシュウ將軍は、城外諸方面に襲撃隊を配置した。その内訳は、第1集団司令官ベルトー將軍に属する歩兵3,400人、大砲20門、1騎兵隊であり、サン・ジェルマンの鉄道線路とリュエイユ村の高地の間に配置した。第2集団司令官ノエル將軍に属する歩兵1,350人、大砲10門でマルメゾン公園南側とサン・キュキュファの池からブージュヴァルへの窪地に配置した。第3集団司令官ショルトン大佐に属する歩兵1,600人、大砲18門、1騎兵隊でリュエイユの昔の風車の前に左翼と右翼の重体と連携し、支援するため、布陣した。この他、2予備隊が手配され、そのうち一つは、歩兵2,600人、大砲18門のマルトノー將軍が指揮し、もう一つは、歩兵2,000人、大砲28門、2騎兵隊で、パチュレル將軍が指揮した。同日午後1時、全軍がその位置に就き、砲兵隊が全線にわたり、砲口を開き、約45分後に、予め定められた信号により、砲撃を終え、歩兵が突撃した。5時頃、夜となり、砲撃も止み、総司令官デュクロ將軍が命令し、各隊をその宿営地に引き上げた。

マイヨー門から22日午後3時発報告による。仏軍の損害は、443人で、その内、士官では2人が戦死、15人が負傷、11人が行方不明となり、兵士では32人が戦死、230人が負傷、153人が行方不明となった⁹⁶。

ガンベッタ内務大臣は、前から仏政府トゥール派遣部に出務していたが、

92 つまり往復料金である。

93 1両は、4分と16朱に等しい。

94 パリは、雨。

95 23日付官報。

96 この戦闘を「ビュゼンヴァルの戦闘」という。

さらに軍務大臣も兼務せよとの命令を報じられた⁹⁷。この人は、今年36歳で、政府の11名の閣僚中最も年少である。そこでその名誉が非常に盛んなものである。

10月23日⁹⁸

昨日城外に小さな戦いがあり、互いに若干の死傷者があったが、異状がないので省略する。

今日、農商大臣が市中の屠殺業者での馬肉の公定価格を発表した。本命令への違反者は、11フランから15フランまでの罰金または、5日以内の拘留が課される⁹⁹。

新聞中に仏国の兵、海陸両軍が6万人、国民衛兵が9万2千人、戦隊10万人がパリ市周囲の布陣だという¹⁰⁰。

10月24日（和暦10月1日に当たる）^{101・102}

新聞中に、中国と英国がいよいよ戦争になろうとし、英国が海軍省に軍艦の派遣を命じ、その第1等装甲艦を急いで中国広東港に向けるという¹⁰³。この戦いは、この夏、6月21日、中国北京で在留の英人と仏人を中国人が殺害したことが発端だ¹⁰⁴。今、仏国が普国と交戦し、国土の浮沈の時であり、他のことに構う暇がない。ただ、英国だけが良い機会を捉え、時宜に乗じ、その欲を満たそうとするのだろう。

10月25日¹⁰⁵

トゥールのガンベッタ内務大臣からジュール・ファーヴル氏宛の24日

⁹⁷ 22日付 le Temps 引用の le Journal de Paris 記事。16日付官報。

⁹⁸ パリは、雨。

⁹⁹ 24日付官報。

¹⁰⁰ 出典未確認。

¹⁰¹ パリは、曇、夕方雨。夜明け5時、日没5時半。気温摂氏5度。

¹⁰² この日、植物園附属の動物園のヤク、シマウマなどの動物が、初めて、屠殺業者に売られる。

¹⁰³ 27日付 le Journal des débats 引用の l'Electeur libre

¹⁰⁴ 出典未確認。ただし、この日に天津で仏人宣教師等が襲われる事件(天津教案)が発生した。

¹⁰⁵ パリは、雨。

付報告¹⁰⁶による。去る18日昼12時普軍5千人がシャトウダン¹⁰⁷（この地はパリの南西に当たる¹⁰⁸）を攻撃し、夜中9時半まで抵抗が続いた。ある時は、市の広場が普兵の死骸で埋め尽くされた。普軍の戦死は、1,800人超と見込まれる。この市は、占領されなかったが、砲撃され、火災が生じた。常駐国民衛兵隊テストニエル司令官は、その大隊の先頭に立ち、戦死した。非武装都市であるシャトウダンの抵抗は、我らの歴史の最も英雄的な頁に記載されるべきである。政府派遣部は、シャトウダン住民家族の必要に対し、助成する貸付金を開設した。以下の命令は、この気高い小さな市が祖国に尽くしたことを示すものである。

トゥール所在の国防政府派遣部は、非武装都市である小さなシャトウダンが1870年10月18日、9時間以上にわたり、5,000人を超える普軍団の攻撃に英雄的に抵抗し、砲撃と火災により、ほぼ完全に灰塵に帰した後にのみ占領されたことを考慮し、この日にシャトウダン常駐国民衛兵隊がパリ市義勇軍とともに奮戦したことを考慮し、仏中に、政府の特別命令により、敵の攻撃に曝される非武装都市に対するシャトウダンの模範を示し、火災と普軍の砲弾のために家を追われた市民の緊急の必要に応じることを考慮し、シャトウダンは、祖国に良く尽くした。10月18日中の普軍に対する立派な抵抗の結果蒙った市民の損害を回復するのを助けるため、内務大臣が10万フランの貸付金を開設する。内務、財務の両大臣が職務に応じ本命令を実施する。

以前に英、露、墺、伊4か国に派遣したティエール氏が去る20日明け方1時にトゥールに戻り¹⁰⁹、近くパリに入城という報道があり、人々が皆和睦か戦争かのどちらに決まったのかを待っていた。

現在のパリ市内の実情を推察すると、門を開き、敵兵を追い払う勢いで

¹⁰⁶ 25日付官報。

¹⁰⁷ この戦闘は「シャトウダンの戦闘」と呼ばれ、市が戦後受けた、レジオン・ドヌール勲章が市の紋章に示されている。

¹⁰⁸ 正元の注である。

¹⁰⁹ 25日付官報。

はない。また、潜入し、和平を求めようという機運でもない。専ら防戦の備えを厚くし、砲台を準備し、国民衛兵を訓練している。その意図が期待することが2つある。その1つがティエール氏が帰り着き、英、露、墺、伊4か国の意見を聞くこと、2つ目が仏国の諸地方から国民衛兵が応援することで、他に策略がないのだろう。しかし、市内に貯蓄した食料を既に1月半分を消費した。

10月26日¹¹⁰

26日付パリ総督命令の発表¹¹¹。

荷物を持つ者または家具、食料品を車で運ぶ者は、全て、その品の所有権と出所を証明する住所地の市町村長の認可証を持たなければ、パリに入れない。この命令は、27日から実施する。

仏国が準備のため、去る10月10日、1,500門の大砲を至急製造するよう鑄造局へ命じた。そして昨25日、250門の鑄造が整い、後の200門が来る28日までに鑄造し、来月10日までには全1,500門ができあがるとその局から報告があった¹¹²。

今日、西国の新聞に、一昨年女王を追放した後、民主共和制度となり、今夏、普国のホーエンツォレルン親王を国王に迎える話も破れて以降、なお共和制度であるが、この度、伊国王の一子アオスタ¹¹³親王を西国の王位に願い受けることになったという¹¹⁴。まさに今欧州の各国が手を伸ばし、他国を侵略しようとする。例えば、露国のトルコにおける、英国のエジプトにおける、墺国のセルビア¹¹⁵における、伊国のローマにおけるように、大が小を呑み、強が弱を併合しようとしていると思う。

¹¹⁰ パリは、一日中雨。

¹¹¹ 27日付官報。

¹¹² 出典未確認。

¹¹³ 後のスペイン国王アマデオ一世。1873年に革命により退位。

¹¹⁴ 11月2日付 Journal des débats

¹¹⁵ なお、後のセルビア王ペタル一世(仏国では、ピエール1世)は、ドイツを嫌い、外人部隊の一員(少尉)として、普仏戦争に従軍した。

10月27日¹¹⁶

メッス要塞の籠城が長く食料弾薬がともに尽き、バゼイヌ司令官が1人の大佐を普本陣へ派遣し、この要塞を開城し、降参することを伝えたと新聞¹¹⁷中にあった。

昨日、パリ市内在住の米、露、英国民80余人が市内を退去した。ただし、この日の退去を仏政府にかねてから申請していたので、仏政府が参謀本部員3名を仏前線の陣へ送り、道路を開き、通行させ、続いて普軍中に送致したという¹¹⁸。

昨日午後1時、旅行者の乗った気球がパリ市内から出たという¹¹⁹。

10月28日¹²⁰

パリ市外サン・ドニの要塞の外で戦闘という通報¹²¹があったが、異状がないというので、ここでは省略する。

近頃、メッス塞が落城したと伝え聞くことが次々にあったが、政府がまだ確定的な報道をしていない。その事実がはっきりしないといっても、世間の論議が極めて騒がしかった。このメッスの要塞は、砦や砲台等が特に守りが固く、さらに、バゼイヌ元帥がその司令官であり、10余万人の精兵を備える。そのため、パリ市民が敵の背後に大きな要塞があることを大きく頼りにするという。

以前、欧州諸国に派遣されたティエール氏が2、3日前にトゥールに帰ったが、今日、パリに入るため、普軍の本陣に使者を送り、ビスマルク首相

¹¹⁶ パリは、曇。

¹¹⁷ 28日付官報によれば、フェリクス・ピヤの *le Combat* のバゼイヌがナポレオン3世の名により、メッスの降伏と和平のために申し出た旨の記事を指し、官報はこの報道を無責任と非難する。

¹¹⁸ 27日付 *le Temps* 引用の *Vérité* 及び *le Temps* 記事によれば、従来仏政府が中立国民の立ち退きに消極的であったが、ウォッシュバーン米公使がビスマルクと交渉し、ビスマルクの許可証を得た中立国民が退去できるようになった。

¹¹⁹ 27日付 *le Temps* には、26日の気球打上の記事がなく、28日付同紙には、27日朝の気球打上げが報じられている。

¹²⁰ パリは、雨。

¹²¹ 29日付官報記載の *le Bourget* 等での戦闘。

にその軍中通過の許可を求めた¹²²。

10月29日¹²³

昨夜、政府は急報を受け、メッス要塞の落城を発表した。しかし、諸大臣は、まだ半信半疑である。今日午後、ジュール・ファーヴル外務大臣がその真偽を探るため、旅立った。その中、午後3時半、ティエール氏がパリに帰り、メッス要塞落城を通報した。このメッス要塞の城郭が諸城塞の内で最も堅固であり、パリ以東の独国境までの間、この要塞が第1であり、ストラズブル要塞がこれに次ぎ、パリ城に1位を譲るのみである。メッスの要塞が堅固である理由は、従来から普国に対し、最も警戒していたからである。そして、その司令官が仏陸軍諸元帥中有名で老練のパゼイヌ元帥であり、10万人の精兵を率いる。普軍が深く進入し、パリ城を囲む前にまず、20万人の兵で厳しくこの地を囲んだ。これは、その背後を危ぶむためである。そして、このメッス要塞がなお存在し、その司令官が老練であり、その兵卒が戦力に優れ、よく防戦すると伝え聞いていたから仏全国が安心していた。しかし、今日、食料が尽き、弾薬が尽き、既に開城し、捕虜となったことを聞き、市内の人氣が挫折し、忽ち望みを失い、世間の批評が喧しい。

新聞の中には、この度ティエール氏がパリに入る際、もし仏国の利益となる重要な大事件を持ち帰るのであれば、あのビスマルク氏が普軍の中を通る入城を中々許さず、拒むだろうが、この度の凶報であるメッスの1事件を、速やかに市内に知らせ、恐怖に陥らせるため、容易くその軍中を通し、入城を許したのだらうという説がある。私もこの説に同感だ。普軍の状態、ビスマルクの胸算用も、やはり、またここにあるだろう。

ティエール氏が昨夜ヴェルサイユに1泊した。昨日、同人が同所に到着したとき、直ちに普国の有名な計略家のモルトケ將軍が来て、その様子を

¹²² 出典不明であるが、29日付 le Temps 引用の le Français は、露皇帝が普王からティエールの通行許可を得たとしている。

¹²³ パリは、曇小雨。

尋ねた。ティエール氏がその神のような速さに非常に驚いたという。続いて途中でビスマルク氏に会った。このとき、ティエール氏が貴方に対し、何も語るべきことはない、と言った。ビスマルクが私は、貴方の意味がよく分かる、と答え、別れた。翌朝、ティエール氏が同市を出発し、夕方、パリに入った¹²⁴。

10月30日¹²⁵

パリ市市内へ10月28日付農商務大臣令の発表¹²⁶。

10月1日付国防政府令により、パリの食糧供給を考慮し、マルヌ川、セイヌ河、サン・マルタン運河、ヴァンセンヌとブローニュの森の中の湖の今でも近づける場所にある魚を徴用の対象とし、公共事業大臣がその漁猟に必要な措置をとる。

市中への食料用馬肉販売に関する29日付農商務大臣令¹²⁷。

1週間毎に各市場では、肉屋に600頭のみ販売する。市場に入る馬は800頭に限り認め、獣医委員会がその中から、屠殺すべき600頭を選ぶ。ガス消費に関する26日付パリ市長命令¹²⁸。

11月1日から多数の火口を持つガス照明の消費者は、2火口の内、1火口の割合で照明を減らさなければならない。同じ日から、個人住宅や公務に用いられる建物全てで、炎の高さを下げることにより、メーターまたは時間で測るガス消費量を半減する。遅くとも、夜10時半には、火口を全て消さなければならない。この措置への違反は、調書に記録され、しかるべき法廷で裁かれる。違反者は、ガスの使用を止められることがある。公道・散歩道局長が本命令を執行する。

¹²⁴ 出典未確認であるが、2日付 le Temps 引用の la Liberté 記事は、モルトケ將軍は、ティエールの自由通行を保証し、ビスマルクとは、偶然、ヴァロワ通りを横断中に出会い、この会話をしたとしている。

¹²⁵ パリは、曇。

¹²⁶ 30日付官報。

¹²⁷ 30日付官報。

¹²⁸ 30日付官報。

国防政府からのメッセ要塞落城の発表¹²⁹。

政府は、メッセ要塞降伏の辛い知らせを確認した。バゼイヌ元帥とその軍は、英雄的努力の後、食料と弾薬が尽き、継戦できず、降伏する他なく、敵の捕虜となった。この残酷な結果は、仏全国に深い苦しみを与えたが、挫けない。パリは、彼らの勇敢さを模範とし、復讐の希望に支えられるだろう。

10月31日¹³⁰

今朝未明からパリ各区の国民衛兵隊が呼出しの太鼓を打ちならし、午前中に各区の国民衛兵が集合し、11時から隊列を組み、国民衛兵数万人が潮の湧くように、市庁舎に向け、馳集まり、周囲に群れ集まり、四方の道路を塞ぎ、非常に騒々しかった^{131・132}。その理由は、この籠城防戦中、政府の権威が発揮されず、様々の件が良く処理されないので、国民衛兵が行動し、再び政府の閣僚を一変し、新たな選挙を企て、一同が競い、行動し、政府に迫ったという。その群衆が数十万人であり、あえて目算できない¹³³。

直ちに、その区長が出てきて、この群衆を説得し、取り鎮めようとしたが、混乱がひどく、言葉も通じない。また、政府の閣僚ロシュヴォールとアラゴの2名¹³⁴が出て鎮めようとしたが、全くこれを聞き入れる者がなく、騒動が益々大きくなった。ついに、市庁舎の門を開き、500人ばかりの国民衛兵が一時に入り、バルコニーに出ようとした。大統領トロシュウ将軍が群衆に会うため、座席を立ち、階上に出ようとしたが、集団に行き合い、トロシュウがここに止まり、群衆に向かい、言葉を出そうとするが、大勢

¹²⁹ 31日付官報。

¹³⁰ パリは、雨。

¹³¹ この事件を「10月31日の事件」という。

¹³² 正元のこの日の記載の出典は未確認であり、また、新聞報道は、異なるが、関連新聞の記事により、検証を行った。なお、正元は、記載していないが、ギュスターヴ・フルーランスが市庁舎内で国民衛兵を扇動し、トロシュウ等の軟禁を指示した旨、多くの新聞が伝える。

¹³³ 2日付 le Figaro は、4から5千人としている。

¹³⁴ 上記 le Figaro 記事は、アラゴ市長とフロケ助役であるとする。

の声が騒がしく¹³⁵言葉が通ぜず、しきりに制し、漸くその言葉が通じた。そのとき、トロシュウは、「市民諸君！一兵士の言葉を聴いてくれないか（一兵士とは謙遜の言葉である）。共和国を守るため命を懸けている私の愛国心を疑うのは無駄だ。総督に任命され、私は、パリ市の守りが無いのを知った。パリは、48時間で（即ち2日2夜である。）容易く落城するだろうという有様だった。私は、努力し、パリを難攻不落にし、それが今日の状況である。どんな強敵も城内に攻め込めない。我が身を守るには総ての手だてが必要なことが分からないのか？我が軍が負けるのは、勝つ努力の不足による。大砲が足りない。我らは、勝つためのあらゆる努力をする。我らは、敵と戦える力を結集してきた。」と言った¹³⁶。

この言葉は、漸く民衆の耳に通じることができた。しかし、その言葉がまだ全部終わらない内に再び群衆が騒ぎ、その道理を聴き入れず、館の前に寄り集まり、その勢いが丁度海水が沸き起こるのと同じであった。この群衆の中には、このように急ぎ、集合するのが政府を倒すためなのか、また閣僚を辞めさせるためなのか、その趣旨を理解しない者がかなり多かった。この時、諸大臣が急ぎ、市庁舎に集まり、人々を鎮めることを話し合った。

午後2時、群衆の中から指導者50人余りが市庁舎に来て、今館内で面談したいが、政府の大臣が会ってくれるかと尋ねた。そこで、その者らを館内に入れた。その群衆の首領がモーリス・ジョリー、シャッサン、ルフランセ等である。政府の大臣を始め幹部が居並ぶ前で、モーリス・ジョリーがなぜ一昨日のル・ブルジェの戦闘¹³⁷で敗戦したのかと問うた。政府閣

¹³⁵ 上記 le Figaro 記事によれば、群衆は、「休戦反対。共和国万歳、死ぬまで抵抗」と書いた紙を掲げ、ティエールを倒せ、などと叫んだとされる。

¹³⁶ 2日付 le Temps 引用の le Moniteur 記事。

¹³⁷ 10月28日から30日にかけての戦闘で、普軍からいったん奪還したが、再度奪われた（第1次戦闘）。なお、第2次戦闘では、12月21日、仏軍が奪還を試みたが、敗北した。この敗北がメッスの降伏、ティエールの普国との和平交渉と合わせて、一部の国民衛兵が政府の失策と対独弱腰と非難し、この騒動を起こす背景となった様子を当時の新聞が描写する。

僚ジュール・フェリーがこれは全てド・ベルマール将軍の指揮の誤りによる等と答えた。その他、また発言しようとする内に、モーリス・ジョリーがまた押し返し、これは貴殿の体裁のための言葉だ等と言った。このような議論中、急に数十人の国民衛兵が銃を持ち、市庁舎に入り、また混乱した。このとき書記役の役人¹³⁸がこれを制し、民主共和の同僚である貴方達がこのような暴動を起こすとは実に恥辱ではないかと言ったので、国民衛兵が怒り、書記役を取り囲み、大声で、こやつを踏み潰せ、踏み潰せと叫び、その狼藉ぶりは言葉に尽くせないという。

このとき、大統領トロシュウ将軍に他所から届いた1文書に、今日は、仏国の末期であり、仏国が動揺するのは仕方がないとあった。また、その大体の内容が今日、政府各閣僚を退任させ、新たに市民の中から選任すべきだという。群衆が館外に益々集合し、街路に満ち溢れた。そこで、近辺の者が全て門を閉ざし、その店を閉じ、また雨の中、道の泥で雑踏の中、数人が怪我した。また、この混乱中、何者かが空中へ向け、銃弾4発を発射し、民衆が益々騒いだ。このとき首領のピヤとドレクリューズの2人が閣僚選挙の書面に、ピヤ、ドレクリューズ、レドリユ・ロラン、ドリアン
の4人を記し、この中から大統領を任命すべきとも書いた。群衆数人が市庁舎の壇上に登り、トロシュウ大統領に迫り、速やかに館を退去せよ、人々が今お前を殺そうとすると罵った。このときトロシュウが私は兵士である、少しも恐れないと返答し、落ち着いた様子でいた。群衆がすぐに政府の諸大臣を取り囲み、皆捕え、閉じ込めた。ただ、ピカールがこの騒ぎの中、この館内から脱出し、至急の電信で、命令を出し、諸大隊を召集した。これが夜の8時である。この形勢がパリに迫る普軍を防ぐよりも最も難しい。また、普軍がもしこの内乱を察知すれば、城内は実に危険になるだろうという。8時半、電信の急報で数大隊が急ぎ来て、この市庁舎を警衛し、直ちに入り、トロシュウ将軍を救い出した。トロシュウは、漸く館を出、ティ

¹³⁸ 原文「官員セクレケル氏」。セクレテール（書記役 *secrétaire*）のことと思われる。

ヴォリ街の居館に向かった。他の閣僚フェリー、ロシュフォール、ペルタン等も幽閉から脱出した。しかし、ファーヴル、ドリアン、シモン等がなお虜になっていた。同9時、トロシュウ将軍がその居館に帰る。諸兵隊が来て、その居館を警備し、諸軍司令官や士官も急ぎ集まった。この夜、トロシュウ将軍が市庁舎から国民衛兵の服装をし、兵士に混ざり、退去したという。同夜12時半、国民衛兵2万人余りがリヴォリ街に満ち溢れた。この夜少し雨が降り、非常に寒かった。しかし、国民衛兵が小銃を持ち、道に立ち、明け方2時頃から次第に減るといっても遊動隊3大隊が市庁舎を警備した。明け方3時、トロシュウ大統領が兵隊を率い、再び市庁舎を奪い、群党が幽囚した各大臣を救出し、その元の職に戻した。明け方4時、数大隊が政府警護のため、市庁舎に集合した。

今夜、諸閣僚を幽閉した時間にこの群党の指導者が市内に本日付ドリアン選挙管理委員長、V.シェルシェール選挙管理副委員長、エティエンヌ・アラゴ市長、フロッケ、ブリソン、エリソン、クラマジェラン各助役連名の次の要旨の発表を張り出した¹³⁹。

今日1時、市庁舎に集まった、20区の暫定区長は、現在の状況で、国家の安全のため、直ちに市の選挙を行うことが必要であると全員一致で宣言した。本日の出来事は、共和主義者を糾合した市の権力を構成することが焦眉の急であることを示す。そこで、明11月1日12時に各選挙区で選挙人が召集される。各選挙区は候補者名簿から4人の代表を選ぶ。この命令は、各区長により実施される。

以上の壁書きを、広く市内中に貼り付けた。しかし、市民がこれを信用せず、無駄な布告であり、白紙といえる。

今日、ティエール氏が再び普軍本陣のヴェルサイユ城へ向かった。これは英、露、奥、伊4欧州大国の仏普両国間の停戦、平和交渉の提案を普代表と会議するためである¹⁴⁰。以前、ティエール氏がこれら4か国に使者と

¹³⁹ 11月1日付 le Journal des débats

¹⁴⁰ 11月1日付官報。

して行き、仏普間の和平を4か国の公平な判断に委ねたいと求めたが、今なお4か国いずれも手を拱き、あえて着手し難い状況であるという¹⁴¹。

11月1日¹⁴² (和暦10月9日である)

昨日の騒動後、狂暴な群衆がついに制圧され、再び以前の各閣僚が元の職に戻り、今朝、ファーヴル外務大臣・内務大臣臨時代理から次の11月1日付発表文¹⁴³を市中20区に張り出した。

昨日発表の張書は、閣僚が監視されていた間、今日物理的に不可能であるが、政府が市民の大多数の意向を知る機会として選挙を知らせたものである。そこで、区長がその責任で開票することを禁止する。パリ市民は、次の木曜日、市と政府の選挙を短期間の内に実施すべきか否かを投票することになる。この選挙が終わるまで政府は権力を保持し、力を尽くして秩序を守る。

今日午後、私は、この市庁舎に行き、その動静をみた。この館の内外四方を国民衛兵数大隊が囲み、警備し、全く人を近づけない。銃剣を組み立て、垣根を作り、勢いが非常に盛んである。ただ、その外の道路上には、群衆が評論、相談し合い、通行を妨げ、その数が幾万人とも知れない。

11月2日¹⁴⁴

パリ市に発表された11月1日付国防政府令の第1¹⁴⁵。

政府の尊厳と防衛の使命にとり、政府がパリ市民の信頼を保っているかを知ることが重要であることを考慮し、また、10月31日朝、パリ市庁舎で合法的に開催された20区長の審議により、定期的に20区の区役所を選挙により構成することが時宜を得たこととされたことを考慮し、次のとおり命じる。

パリ市民が国防政府の権力を支持するか否かを11月3日木曜日朝8時

¹⁴¹ 2日付 le Temps 引用の la Liberté は、4カ国が仏国に講和交渉を行う権限を持つ通常の政府を構成させるために、休戦させるという案を提示した、とする。

¹⁴² パリは、晴。

¹⁴³ 11月2日付 le Journal des débats

¹⁴⁴ パリは、晴。

¹⁴⁵ 2日付官報。

から夕6時まで各区の定例の投票所で投票する。また、11月5日土曜日に、区長と3人の助役の選挙を行う。本命令を内務大臣、パリ市長、現在の各区長とセイヌ県担当政府閣僚がそれぞれその職務に従い、実施する。

パリ市に発表された11月1日付国防政府令の第2¹⁴⁶。

国防政府は、籠城中、街中での全ての無秩序を鎮圧することを断固決意し、政府と国民衛兵が一瞬たりとも敵との抗争をゆるがせにはならないので、次のとおり、命じる。

通常の訓練以外に定例の召集なしに、武器を携え、市中に出る国民衛兵の大隊を、全て、直ちに解散し、武装解除する。通常の訓練以外に又は通例の命令なしに出動させた国民衛兵大隊の隊長は、軍法会議に呼び出される。

パリ市に発表された11月1日付国防政府令の第3¹⁴⁷。

国防政府は、次の8名の国民衛兵隊の隊長を罷免する（隊長の名を略す）¹⁴⁸。後任の選挙日は、追って示す。

パリ市に発表された11月1日付国防政府令の第4¹⁴⁹。

第3地区司令官クレマン・トマ將軍をセイヌ国民衛兵隊の次席副総司令官に任ずる。

考えると、この隊長を免職されたのは、先日、国民衛兵を煽り、政府を騒がした連中であつた。今日、諸民が市内の状況の方向が分らず、明日の投票の結果の決定を待ち、論議が大変盛んであつた。

西暦11月2日（和暦10月10日）夜、記し終わる。

（巻の3完）¹⁵⁰

146 2 日付官報。

147 2 日付官報。

148 フルーランス以下 8 名である。巻の 6 参照。

149 2 日付官報。

150 本稿では、著者渡正元の原文に即し、現代語訳を進めた結果、現在では、差別表現と受け止められる可能性のある表現が残る可能性があるが、それは、原著者も訳者も意図しないことである。